

## 祝福泥棒

創世記二七章―29節

ヤコブの腕が兄エサウの腕のように毛深かったので、イサクは見破ることができず、祝福しようとして……。 (23)

死期が近づいたイサクは、神のお告げに背いて、兄エサウに相続の祝福を授けようと思いました。これを耳にして妻リベカは弟ヤコブを愛していたため、目が見えなくなっていたイサクをだます偽装工作をヤコブに授けます。母の指示通り、ヤコブはエサウになりすまして父イサクの前に出て、祝福の祈りを受けました。見事に父を騙し、神の祝福をエサウから奪い取ったのです。私たちの感覚ですと、こんなマネをして神の祝福を横取りしてもいいのだろうかと疑問に思います。しかし、神は確かにこのヤコブをイサクの跡継ぎとして選ばれたのです。神の祝福を得ることに執念を燃やしたヤコブの熱意に、神は目を留められたのです。横取りまでして神の祝福を得ようとするこの熱心さにおいては、ヤコブに倣いたいものです。神は求めてくる者に豊かに与えてくださるお方だからです。